［特集］自閉症スペクトラムの特性理解の新たな視点

特集にあたって

本誌編集委員　奥住秀之

本誌の自閉症スペクトラム（ASD）に関する特集を創刊から振り返ってみた．2000年以前は，「自閉症の治療と教育」（1979年），「自閉症研究の展望と実践課題」（1989年），「青年期・成人期の自閉症」（1998年）．10年に1度のペースでその数は決して多くない．21世紀に入ると，「LD・ADHD・高機能自閉症の保育・教育」（2002年），「高機能自閉症とアスペルガー症候群」（2004年），「自閉症・知的障害等の『強度行動障害』」（2005年），「自閉症の社会性障害」（2007年）．2年に1回の頻度だ．知的障害を伴う自閉症のみならず，高機能自閉症やアスペルガー症候群なども含めて，教育，保育，福祉など様々な領域でASD支援への関心が一気に高まった時代だった．

本号は本誌としては2007年以来の特集だ．しかしこのことは本誌の関心がASDから薄れたことを意味しない．むしろ逆で，特別支援教育，療育，子ども理解，家族支援，発達診断など多くの特集においてASDは常に議論の中核にあった．

ところで，ここ数年，視覚優位性や同一性保持などASDの特性という視点が保育や教育で強調されている．その結果，視覚に訴えかける絵カードや写真カードの利用，社会的に適切なふるまい方のパターンを学習するソーシャルスキルトレーニングなどが多くの現場で試みられてきた．ASDの行動を特性とつなげるこうした考え方は，行動上の問題の原因が彼らの努力不足や養育環境によるものではないこと，だからこそ特性への適切な理解や支援が必要であることなどの重要な視点を提起した．他方で，特性論が重視されるあまり，その特性は不変性が高く，また独立性の強いものだという狭い理解につながってしまったような気もする．

私たちは，ASDの障害特性を重視しつつ，一人ひとりを丸ごととらえるための発達や生活の視点が不可欠であること，その特性は発達とともにダイナミックに変動すること，特性は独立した機能ではなく様々な機能の連関の上に成立していることなどの視点を大切にしてきた．

本特集は，ASDの特性という問題について新たな視点から切り込んだものである．特性理解と発達連関に関する2つの理論的論文，新しい発達障害診断マニュアルであるDSM-5の論文に加えて，障害児学級でのなかまとの遊び活動，「独自の想像力」をもつASD者の造形表現，ASDのある大学生が語る友人関係の歴史など，自閉症の特性を大切にしつつそれにとらわれすぎない実践，なかまとのかかわりを通して特性を前向きにとらえていく実践が掲載されている．本誌がASD理論と実践についての最新の学びを深められる貴重な一冊であると確信する．

なお，DSM-5では，ASDに「自閉スペクトラム症」という訳が当てられている（詳細は本誌所収の土岐篤史論文を参照）．しかし，この訳語はまだ一般的ではなく，また今後のICD-11の改訂動向とも関連するため，本特集では，自閉症スペクトラム，自閉症スペクトラム障害，自閉症など，用語統一を行わなかったことを付記する．

（おくずみ　ひでゆき　東京学芸大学）